

衣のNGO

ふるぎのゆくえをいかに?

JFSA

わたがたぶくらしをささえる
せかいのまさとさをかしたてる

NPO 法人日本ファイバーリサイクル連帯協議会
〒260-0001 千葉市中央区都町 3-14-10
Tel・Fax : 043-234-1206
E-mail : jfsa@f3.dion.ne.jp
ホームページ : <http://www.jfsa.jpn.org/>

会報 47号 2018年9月

特集 パキスタン派遣報告

震災以前からこの村の周辺には1~10年生までの学校しかなく、カレッジ以降学びたい子どもは向かいの山の中腹に見える学校まで通わなければならなかったそうです。カユーム氏は遠くに小さく見える学校を指差しながら「向こうの山まで行くためにはいったん私たちのこの山を下ってから登ることになります。私は毎日、片道1時間以上かけて通いましたよ。」と話しました。

パキスタン大地震~青空学校のいま、そしてこれから
4ページより抜粋

青空学校のあるケートサラシ村で暮らす子どもたち

目次

● 特集 ●	パキスタン派遣報告	東葛センター便り 「模様替え」	12p
	「パキスタン大地震	千葉センター便り 「違う角度から」	13p
	青空学校の今、そしてこれから」	心根（こころね）フリマ通信	
	「学校がもたらすコト」	「パザールの少年の面影から」	14p
	「新規事業に向けて」	第61回コンテナ送り出し	15p
招日報告	選択肢が広がる	チャエ ケ サート	15p
		JFSAからのお知らせ	16p

パキスタン大地震 ～青空学校のいま、そしてこれから



青空学校の子どもたち。授業は午前のみで、現在15名の子どもたちが学んでいる。

海外事業担当事務局 依知川 守

被災地とカラチを結んだ カユーム氏の存在

2005年10月8日、パキスタン北部で発生した大地震（マグニチュード7.6）は山岳地帯の村を直撃し、8万人もの人々が亡くなりました。また地震が朝8時50分に起きたことにより、すでに登校していた子ども達の多くが校舎の下敷きになり亡くなりました。校舎に必要な鉄骨が入っていなかったことも被害を大きくしました。この地震が日本のニュースで報じられると、パキスタンであったため、JFSAにもアル・カイルアカデミー（以下アル・カイル）を案じる声が多数寄せられました。パキスタン南部のカラチ市にあるアル・カイルから北部の被災地までは1600km以上も離れており、学校は直接的な被害は受けませんでした。しかし被害が大きかったバラコト地区は、アル・カイル事業グループ（以下AKBG）事務局のカユーム氏の故郷で、彼の親族も約50名のうち、35名が犠牲となりました。アル・カイル

ル、そしてJFSAのメンバーはカユーム氏の存在を通してこの震災と被災者の人々の存在をとて身近に感じ胸を痛めました。そしてアル・カイルのムザヒル校長からの「たとえ貧しい暮らしの中にいても、その想いをかたちにしていくことが子どもたち、スラムの人々にとってほんとうの自立を育てていくことにもなる」と考え、学校として支援を行ないたい。私たちのスラムでの活動の経験からいっても、一方的な支援ではなく、小さな規模、小さな支援であっても、被災地の人々を主体として、彼らの協力を得て被災民のニーズに確かに応える支援を行ないたい。貧しくはあるけれど、スラムの子どもたち、人々だからこそ気づくこと、出来ることを、子どもたちとともに。」というメッセージを受け、JFSAもアル・カイルの被災地支援に協力することを決めました。JFSAは協力団体や会員の皆さんにも協力を呼びかけ、約1100万円のカンパ金が寄せられました。

緊急支援

そして青空学校の開設へ

JFSAは地震から10日後には、事務局員を被災地に派遣し、パキスタンのメンバーと協力して情報収集と支援方針の検討を行いました。国際NGOなども被災地で活動を開始していましたが、支援の手はまだ被災者へ十分には届いておらず、まずは生活に必要なテント・食料・防寒着などを用意し、配布することにしました。その際、すでに大規模に行なわれ始めていた「ばら撤き」型の配布はせず、バラコト地区、ケート・サラシ村の村人たちの協力を得て、相談窓口を作り、支援活動を行ないました。物資を配布する緊急支援はしばらく続けられましたが、ある時村人たちの様子を見てカユーム氏が言いました。「物を配る支援はもう止める必要がある。」テントの中には必要以上の毛布が積み上げられ、元々質素な暮らしをしていた村人の意識が変わっていく・・・村人でもあるカユーム氏の言葉を私たちが重く受け止めました。

震災から約2ヶ月後、再びアル・カイルのメンバーとJFSA事務局は

被災地の村を訪問し、中期的な支援として青空教室の開設を決めました。

ただ周辺の学校は再開されておらず、テントや青空の下で行なわれる授業には30名以上の子ども達が集まりました。その時の様子をJFSA事務局（当時）の西村氏はこう記しています。「とにかくも、学校が開設された。子ども達の多くは家族を地震で失っている。心の痛みは大きいだろう。しかし、この場に集う事で少しでも痛みが和らぐ事を願う。子どもにとって仲間の存在は元気になる大きな力になるはずだ。この青空学校はそんな場であって欲しい。また、子どもの元気は親の励みにもなるだろう。」しばらくして小さな校舎が建てられました。以降もこの学校を私たちは「青空学校」と呼び続けています。また近隣の公立学校の再開とともに青空学校は幼児のためのクラス（保育園クラス・幼稚園クラス）を中心としたものになり、今日に至るまでの10年余り運営が続けられてきました。今回2年ぶりにバラコトと被災地の村を訪問した目的は、青空学校の現状を知ること、そして村人たちの考えをあらためて聞くことでした。

青空学校の今とこれから

震災直後は、余震の心配や、政府からの避難指示もあり村人の多くがいったん山から下り、別の町へ避難しましたが、現在は震災前の人口の半数くらいが村で暮らしているようです。震災前と同様に多くの村人は、家族の男性数人が都市部や外国へ出稼ぎに行き、残された家族は段々畑でトウモロコシなどを作り、水は湧き水を使い、炊事は薪を燃やして行ない暮らしています。カユーム氏は「学校の運営はカンパ金を少しずつ使って行なわれ、残金は35万円程です。今のあたりでなら、2年半くらいは続けられます。」と教えてくれました。

パキスタン北部地震 カンパ金の使いみち

1. 被災したマンセラの人々への支援
必要な物資の支援とその後の生活再建への協力
2. アル・カイルアカデミーへの支援
今回の地震の後で地元のドナーからのアル・カイルアカデミーへの寄付が減ってしまうなどの影響があると、運営がむずかしくなる可能性があり、それを支えるための寄付。
3. この活動に必要な経費
アル・カイルアカデミーとJFSAがこの活動を実施するために必要な経費。

カンパ受付期間: 2005年10月21日～2006年1月31日
カンパ金総額: 約1100万円



左からAKBGのカユーム氏、村のリーダーのバシール氏、カリー氏

アル・カイルアカデミー本校のあるスラムで暮らす人々

本校の第一期生であり、家の事情で中退したムハマッド・アリさんに相談し、副校長のタスニムさんと共に本校の周辺で暮らす人々のお宅を訪ね、インタビューを行ないました。中へ入るとアリさんの友人のアミールさんが、怪我をした足を抱えて座っていました。彼は数ヶ月前に、仲間と街道沿いの店でチャイ(ミルクティー)を飲んで一服していたところ、バイクが暴走しながら突っ込んできたのだそうです。その後も後続車2台にひかれてしまい、彼は足以外にも全身大怪我を負いました。足の金属製の器具は中の骨を固定するためのものです。彼に怪我を負わせたバイクの若者たちは直ぐさま逃げ去ってし

まい、残された彼にはなす術がありませんでした。長引く治療費も含め、彼は何の補償も得られていません。アリさんは「お金のある人なら、事故を起こした車の持ち主を特定して法廷で争うこともできるでしょう。しかし貧しい人はどうしようもないのです。この国では警察も頼りにはなりません。」と話してくれました。今は兄弟のリキシャ(3輪タクシー)の仕事と、母親の内職仕事による収入でなんとか暮らしているそうです。彼がいつ回復できるのか、まだ目処はたっていません。



右からアミールさんのお母さん、アミールさん、義理の妹



リキシャと呼ばれる3輪タクシー
ドライバーが仲間と休憩中(カラチ市内)

古着価格交渉について

第57回から61回目までの5回分のコンテナに関して、AKBGが卸業者のニアーズ氏へ売却することは決まっていた。しかし、双方の意見の食い違いや価格の折り合いがつかないことを理由に、価格が妥結せぬままの状態でした。これまでも妥結が遅れることはありましたが、このように複数回分が妥結しないままというのは異常な状態です。

今回の派遣中もニアーズ氏をムザヒル校長宅へ呼び、AKBGメンバーとの価格交渉が行なわれました。その中ではこれまでの経緯についてあらためて話され、やはりこれまでの交渉の中で、お互いの言葉に対する誤解が根本にあり、さらに双方の提示している価格のひらきがお互いのやり取りを困難するという悪循環に陥っているようでした。交渉の後、食事を共にし、和やかな場面もあったのですが、結局その日も妥結には至りませんでした。その後は現地でバクラ・イード(※犠牲祭)があり、双方がさらに多忙になり、さらに時間があてしまいました。私たちが帰国してから2週間を過ぎた頃「ようやく妥結した」との報告がAKBGからありました。

ホッとする一方で、今後同じようなことにならないようお互いの信頼関係を大切にする必要をAKBGと確認しました。なぜならその信頼関係は古着をJFSAへ送ってくださる皆さんへと繋がる大切な関係だからです。



荷下ろしされるJFSAの第61回分のコンテナ
8月18日にAKBGのカユーム氏からニアーズ氏の倉庫に荷物が下ろされたと報告があった



コンテナの中のリストを見ながら交渉を行なう
卸業者のニアーズ氏(左)とAKBGのイザール氏(右)

※バクラ・イード(犠牲祭)
イスラムの故事にちなんだお祭り。パキスタンの公用語のウルドゥ語でバクラは山羊、イードはお祭りです。この期間にお金のある家庭では、山羊や羊、牛、ラクダ等を屠殺し、家族、親しい人、貧しい人への寄付に三分割して食べます。

震災以前からこの村の周辺には10年生までの学校しかなく、カレッジ以降学びたい子どもは向かいの山の中腹に見える学校まで通わなければならなかったそうです。カユーム氏は遠くに小さく見える学校を指差しながら「向こうの山まで行くためにはいったん私たちのこの山を下ってから登ることになります。私は毎日、片道1時間以上かけて通いましたよ。」と話しました。その後、私たちは村のリーダーのカリー氏、バシール氏に会い、またカユーム氏は村の女性たちにもインタビューをしました。

青空学校について

幼児クラスは村周辺の公立学校ではなく、青空学校の幼児クラスで学ぶことで1年生に進む場合はスムーズに移行できて助かっている。また幼児の段階で学習を習慣づけることも大切だと感じている。

幼児にとつては周辺の急傾斜の山道は危険で心配なので、村の身近なところに学校という居場所があることは安心だ。

今後の希望

できれば将来的には幼児クラスだけではなく、マトリック(10年生)まで学べるような学校がよい。幼児3年生位の子どもたちが、近場で学び続けられると助かる。

女子生徒を公立学校のある隣の村まで通わせるのは心配だ。そのためこれまで村の女子の多くは低学年で学校を辞め、家事手伝いをするようになっていた。しかし女子にとつてもせめてマトリック(10年生)まで教育を受けることは、物事を自分で考え、判断するためにも大切だ。女性が安心して学べる学校が必要だと感じている。

私たちはその後カラチへ移動し、アル・カイルのムザヒル校長にも青空学校の様子や村人たちの言葉を共有しました。ムザヒル校長は「村人たちとも話し合い、アル・カイルとして今後の方向性を考えます」と話しました。

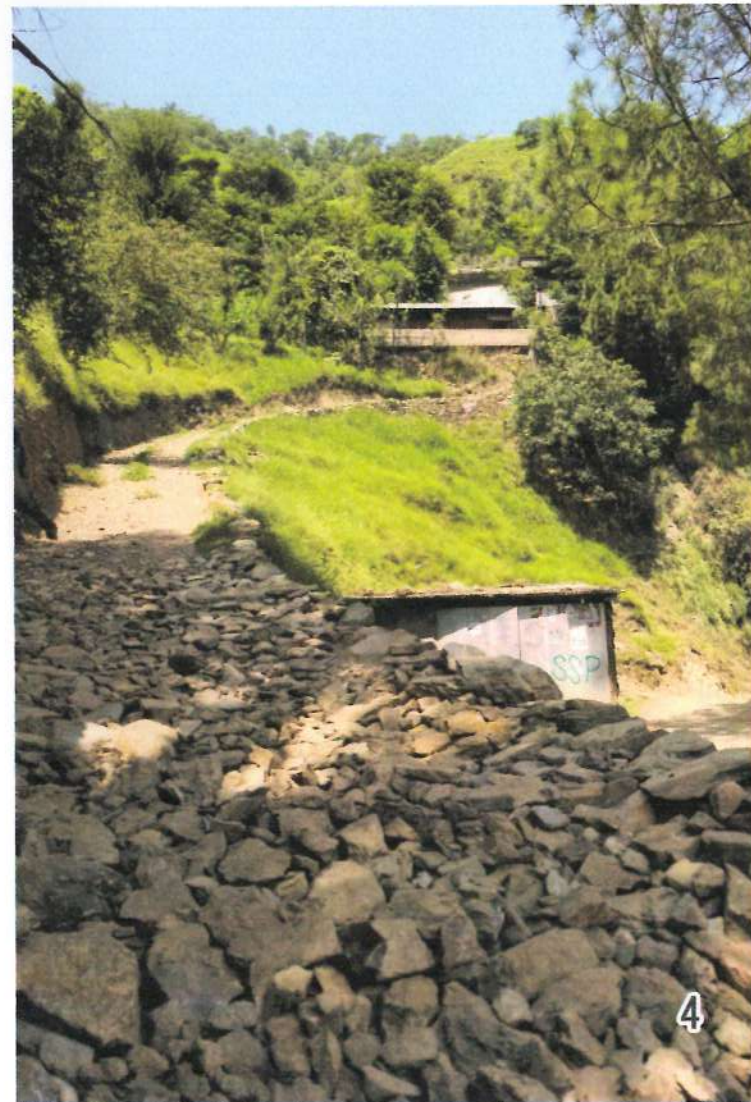
今後について考えるとき、私は被災地支援をはじめの際にアル・カイルとJFSAで確認したことを

思いかえしています。それは「被災した村人たちが主体となること」そして「事業おこしも含め、活動を資金面で支える方法を考える」ということです。

震災から13年が経とうとしている今、あらためてアル・カイルのメンバーや、青空学校で学んだ生徒たちや村人たちとともに、青空学校を今後どのような場にしていくのか？そしてその場をどのように支えて行くのか？じっくりと話し合いたいと思います。



上: AKBG事務局カユーム氏の姪(弟の娘)彼女の家族はこの村で暮らしている 洗浄用の土を使い、湧き水で鍋を洗っていた
右: 青空学校まで続く、急な坂道奥に見える建物が青空学校





学校がもたらすコト

アル・カイルアカデミー本校の幼稚園クラスの子どもたち教室が新しくなった

アル・カイルアカデミーの学ぶ環境

アル・カイルアカデミーの本校は、教室の多くが薄暗く、子どもたちが勉強するのによい環境とはいえません。また、生徒数も年々増加しているため、教室を増やさないと入学希望者を受け入れることもできません。このような課題を解決するため、グリーンコープの支援を受けてソーラーパネルを設置する工事や、パキスタンの銀行からの寄付で、新しい教室を作る工事が、授業中でも休むことなく行なわれていました。また、場所の問題だけでなく教師の不足も課題として残り続けています。特に新しくできた分校（キャンパス4〜7）では、子どもたちが進級すると、生徒のいなかった7年生や8年生のクラスを来年以降作らなければなりません。子どもたちの学ぶ環境を整えるためにも前回の会報で報告したJFSAとAKBGの新規事業は実現できればひとつの試金石となるでしょう。

キャンパス3で一人の男の子にインタビューを行いました。11歳の彼は

現在4年生で、8人の兄弟、姉妹の5番目です。彼は将来、医者になりたいと教えてくれました。その理由を尋ねると、彼の住んでいる村には医者がいないからだそうです。少し緊張しながらも凛々しい表情で答える彼に、学校のこと以外で楽しいことや好きな事を尋ねました。「午前の授業が終わるとマドラッサ（イスラム教の宗教学校）に通っています。その後友達とクリケットをすることが楽しいです。」と答えてくれました。その時の笑顔は無邪気なものでした。

学校という場所

学校で学ぶことや、学び方を知ること、様々な生き方の選択肢を子どもたちが自身が考えられるようになり、家族や近隣の人々へも広げていくことができる。今回の派遣を通して感じました。一方で、学校で授業を受けることだけが重要ではないということも忘れてはいけません。バラコートにある青空学校を卒業した子が道端で友達とタイヤを転がして遊んだり、キャンパス3の男の子のように友達とクリケットをすることも大切です。私

東葛センター担当事務局 小島 慧

今回は、私がJFSAの事務局となつてから初めてとなるパキスタン派遣でした。派遣の目的は、一つ目が2005年の大地震の後からAKBG事務局のカユーム氏の故郷でもあるバラコートで始めた青空学校の現状把握と今後の展望を村の人たちにインタビューをすることです。二つ目がアル・カイルアカデミーの各キャンパスの現状把握と生徒へのインタビューをすることです。そして三つ目がAKBGの理事会で日本から輸出したコンテナの価格交渉や今後の活動方針等の確認をすることです。この三つが今回の派遣の主な目的でした。今回の報告では一つ目と二つ目を取り上げていきます。

青空学校のあるバラコート

バラコートでは現在も幼児のためのクラスは継続していて、山間の村々から15人ほどの生徒たちが通っています。現在は10畳ほどの小屋の様な校舎の近くまで、舗装された道が整備されてきています。二日間学校を訪問しました。一日目はすでに授業が終わっていたので、近隣の民

家にお邪魔し、近くに住んでいる青空学校の卒業生（16〜20歳）3人の青年にインタビューを行いました。大地震でそれまで通っていた学校が倒壊してしまいましたが、青空学校が開校されたので学び続けることができましたと教えてくれました。将来の夢について尋ねると、1人は大工や左官の仕事をしたいと答え、あとの2人は軍人になりたいと答えました。なぜこの平和なバラコートで育って、軍人になりたいのですかと尋ねると、今でも戦争は続いているし、国を守りたいからだと言っていました。

二日目は学校を訪問しました。学校の子どもたちは3歳から6歳で、男女比は3対7ほどでした。女の子の多くは幼い弟や妹の面倒をみながら元気に英語のアルファベットを発音していました。

にとつて初めてのパキスタン派遣では、残念ながら日常的な言語であるウルドゥー語もほとんど分からない状態でした。そのため今回の派遣ではアル・カイルアカデミーという場所が勉強をする為だけではなく、周辺の人々を繋げる場所にもなっているのかどうかを直接聞くことはできませんでしたが、しかし、下校する子どもたちが

楽しそうに会話する様子を見て、勉強するだけの場所ではないように感じられました。アル・カイルアカデミーのような場所を継続していき、入学できずにいる子どもたちのためにも日本で協力してくださる方々の輪を広げていく必要があることを、今回の派遣を通して強く感じました。



青空学校の卒業生にインタビューをするJFSA事務局の依知川（右）とカユーム氏（右から2番目）



街中でクリケットをする少年たち（カラチ市内）

新規事業に向けて



シャーシャ・コロニーの倉庫と古着を大量に積んだトラック

海外事業担当事務局 田辺航太郎

また別の人で、30坪ほどの倉庫で古着仲卸業を1人で営んでいる人にも話を聞きました。その人は「シャーシャ・コロニー」の元卸業者から、アメリカから輸入されたジャケット（ジャンパー、コートなど）着全般的にTシャツ、ジーンズを仕入れて、良いものから順にA、B、C、Dとランク分けをして販売していました。善し悪しの基準はデザインとコンディションだそうです。Aはタイや日本向け、B以下は国内向けだそうです。タイから買い付けに来る人は多く、日本からはまだそうです。国内の小売業者は店舗を構えている地域によって小売価格が異なるので、所得に合わせた物を買っていくとのことでした。中には日本などで人気のヴィンテージ古着もあり、話をしているときに持ち出しきり、いつ頃作られたものなのかとか、日本の古着屋はいくらぐらいなら買ってくれるだろうかと質問されました。大体の価格などを伝えると、スマートフォンで写真を撮って価格と一緒にメールで日本のお客さんに伝えていました。商魂たくましいな、便利な世の中だなと思いました。

シャーシャ・コロニー

こちらも以前は「シエールシャ」と呼んでいた地域です。ビハール・コロニーと高速道路を挟んで向かい側にあります。道路は上下線の間に川が流れているため、車で行き来するために大回りしないといけません。距離でいえば近くになります。ニアーズ氏の倉庫はここにあるので、日本から送った古着のコンテナはこちらに到着します。ワリー氏も同じ地域の中で倉庫を持っています。どちらも賃貸ではなく所有しています。この地域は住居が一緒になっておらず、ビハール・コロニーと比べると大きな倉庫が立ち並んでいます。古着関連の倉庫もたくさんありますが、そのほかにも食べ物や家具など様々な業種の倉庫や、工場などもあります。賃貸の物件もありません。売られている倉庫もあります。その中でも最大規模の倉庫で古着の元卸業を営んでいる会社を訪問しました。そこはシャーシャ・コロニーだけでなく、カラチ特別輸出加工区にも倉庫を持ち、アメリカやイギリス、ドイツ、韓国、日本など、世界各地から古着を輸入し、それらをまたアジア、ア

新規事業に向けての調査

前回派遣時の報告で、AKBGの卸先であるワリー氏、ニアーズ氏の事業について書きましたが、今回の派遣時ではその現場となる卸問屋街、「ビハール・コロニー」や「シャーシャ・コロニー」を訪問してきました。新規事業にとっても現在拠点を構える候補となっている地域です。

ビハール・コロニー

カラチ市を走る高速道路、ライアリ・エクスプレスウェイの港側の起点からほど近い場所にあるこの地域には、古着の仲卸業者が多く軒を連ねています。以前ニアーズ氏はこちらに拠点を持っていました。最近気が付きましたが、インターネットで見られる地図でこの辺りを見ると地名にカタカナが振ってあり、ビハール・コロニーとなっています。自分たちはこれまでこの地域を「ベヤール・コロニー」と表記していました。が、こちらに合わせたら誰でもわかりやすくなるかなと思うので、こっ

ちにしてみます。良かったら検索してみてください。

この地域では、倉庫の大きさは20坪から100坪ほどで、建物の1階部分が倉庫となっており、2階以上が住居となっていることが多いです。そのため倉庫は基本的に賃貸です。住居部分はこの地域で働く人たちのアパートになっていたり、ビルのオーナーが住んでいたりと、地方から出稼ぎに来ている人も多く、親戚同士で1つの部屋を借りて暮らしていることも多いです。そこで働いている1人に話を聞いたら、叔父さん、従兄弟2人、弟、自分の5人で1つの部屋を借りて暮らしていると言っていました。仕事場はそれぞれ別々で、仕事内容も古着、建築、運転手と様々でした。長く1つのところで働いている人もいれば、転々としている人もいます。田舎と行ったり来たりしている人もいます。このことでした。話を聞いた人はビハール・コロニーの古着仲卸問屋で半年ほど働いていて、稼ぎは「まあまあ。悪くはない」とのことでした。

フリカを中心の世界各地に輸出している会社でした。滞在中もほとんどの時間をその社長さんは電話で商談をしていましたし、トラックが入りしは荷物が行ったり来たりして大忙しの様子でした。敷地は1千坪以上あるように見え、中には人が通れる通路を残し、梱包された古着が5メートル以上の高さで積み上げられています。



上：古着屋が集まるビル（マジュリクセンター）の中
小売商がシャーシャ・コロニーやカラチ特別輸出加工区の仲卸業から古着を買って販売している

右：卸業者ワリー氏の倉庫で古着の選別
奥（中央）で作業しているのが事務局の田辺
JFSAに輸入する古着を選んでいる





選択肢が広がる

協働事業担当事務局 田邊 紀子

JFSAでは毎年、アル・カイルアカデミー、AKBGとそれに関わる人たち数人を招日して、協力団体を訪問したり、ボランティアの人たちと交流したり、理事や事務局と話し合ったりします。

宿泊は事務局やボランティアの方の家で、今回はファイバースイックル四街道（FR四街道）代表の村上さんのお宅にも泊めていただきました。地域のメンバーの方たちもいっしょに用意していただいた夕食を、馳走になりながら、学校の様子や縫製工房のことなどを話をしました。

FR四街道はスラムの女性が仕事を自分で立てようという縫製工房の立ち上げの趣旨に賛同して協力を続けています。これまでに、FR四街道が行っている地域での古着回収



- ①ファイバースイックルうらやすの“ゆかた市”会場を訪問
メンバーが着用しているエプロンは縫製工房の作品
- ②アジュラク模様のエプロンを着るFR四街道のメンバー
- ③生活クラブ東京50周年記念のバッグのサンプルを作るサルマさん（縫製工房で）
- ④パルシステム千葉本部を訪問（理事の方たちと）

拠点の目印となる旗や、ティッシュボックスケース、パキスタンの伝統染物のアジュラクのエプロンなどを縫製工房にオーダーしています。代表の村上さんは、「ぜひパキスタン国内で販売する製品作りをすすめてほしい」と言います。仕事を通じて地域での人の関係をひろげていくことが出来るからです。

NPO法人地球市民交流基金アジア（以下アジア）は、アル・カイル職業訓練所の設立（2001年）と運営を支援しています。また、フェアトレード販売事業の収益の一部でアル・カイルアカデミーの給食費支援をしています。2年前には代表と副代表の方がパキスタンを訪問し、昨年からは縫製工房で作った製品の開発と販売にも取り組み始めています。今年にはパキスタンを訪問する機会が作れないので、今回の招日のときに縫製工房スタッフリーダーのサルマさん呼びたいと、渡航費の一部を出していただきました。7月6日（金）には、地域の方たちも参加したアジア主催の交流会が開かれました。

交流会でサルマさんは、どうして縫製工房の仕事を始めたのかと聞かれ、「父親は貧しかった、学校は5年生で中退して縫製の仕事をし、結婚して夫が経営する小さな縫製工場場で仕事をしていたが、夫を病気で亡くして続けられなくなった。家は学校の近くにあり（2人の子どもはアル・カイルアカデミーの生徒）、副校長のタスニームさんに声をかけてもらい始めた。日本のことはまったく知りませんでした。日本はオーダーを受けて仕事をするようになり、細かい要望があることで技術があがること、作り手と使い手がつながっていることが嬉しいです。」と答えてくれました。



今回は、アジアンのオーダーのカディ（手織りの生地）で作ったエプロンのサンプルを持ってきていて、交流会の後の会議で意見交換をしました。エプロンの開発を担当されているアジアン理事の森田さんからは「自分たちも職業訓練（縫製科）につながる縫製工房の製品開発が出来て嬉しい、自分の希望としては将来パキスタン国内で販売するルートを作ると良いと考えている、たとえばサルマさんが中心になってお話を開くこともよいと思います。」という意見をいただきました。

います。そのご縁で新しい企画が生まれることや、アドバイスをもらうこともあります。お店を開くというアイデアはともよいと思います。しかしパキスタンでは、女性が仕事を自分で立てようことへの理解はきびしいものがあります。1947年の独立以来、識字率や就学率は上がり続けていますが、今でも平均識字率は60%ほどで、女性の識字率は50%に届きません。ユニセフの調査（2011〜2016）では、若者（15〜24歳）の識字率も男80%、女66%という開きがあります。最近カラチ市内にできた大型ショッピングモールでは女性の店員も見かけますが、古くからあるバザールで店に立つのはすべて男性です。

でも、ムザヒル校長は、「子どもたちは、学校に入ったときはそれまで育った家庭の環境をひきずっているが、次第に変わっていく。そして、学ぶ機会を持つことで職業の選択肢を広げていくことができる。」と言います。30年間、スラム地域での教育を実践してきたアル・カイルアカデミーとともにある縫製工房であれば、可能性はあります。

タスニームさんとサルマさんには、「工房のスタッフも学ぶ機会が必要だと思います。できないことがあれば出来る人から学ぶ機会をぜひ作ってください。子どもたちも学校で学んでいるのですから。」と願いました。

招日メンバー
アル・カイルアカデミー ムザヒル校長
アル・カイルアカデミー タスニーム副校長
縫製工房スタッフリーダー サルマさん

招日スケジュール
7/3（火）生活クラブ茨城交流会
7/4（水）第61回コンテナ送り出し
7/5（木）パルシステム千葉本部訪問
FRうらやすゆかた市見学
FR四街道交流会
7/6（金）NPO法人アジア交流会
7/7（土）生活クラブ東京大田センター展示会
7/8（日）日暮里織維街見学



- ⑤カディのエプロンの試作品を確認するアジアンスタッフ
- ⑥カラチ市内のバザールのお店
- ⑦アル・カイルアカデミーの教室で学ぶ子どもたち
- ⑧生活クラブ茨城本部での交流会

男性物の売り場を倉庫スペースに移し、拡大してから丸1年が経ちました。男性の方にももっと来店してほしい、ゆっくりと見られる場を作りたいたいという気持ちから始まりました。12月からは輸入古着も出し始めました。売り場としてだいぶ定着し、男性のお客さんや若者も増えてきました。

お店には、本当に様々な人がきます。近所の会社の方が昼休みや仕事終わりに来たり、すぐそばのスタックのママさんが来たり、昔は競馬の騎手だったというおしゃべりなおじさんや、スカートやハイヒールを試着して楽しんでいく小学生や、古い着物やモンペが好きなアメリカ人の方や、バナナや大福を差し入れてくださるおじちゃんなど、挙げていくとときりがありません。

そんな中、毎日倉庫の前を通ってお店をのぞいていくおじさんがいます。時々酔っ払って困ることもありますが、調子の良い時は世間話もしていき、悪い人ではなさそうです。先日、私がお店の奥にあるミシンでスポンの裾上げをしていたところ、そのおじさんがやって来て、私の作業する様子を見と見て、どのくらいミシンをやっているんだと聞かれました。1年ちょっと前から始めて、まだ裾上げしかできないと答えると、おじさんは、自分は若い頃は縫製の仕事をやってきたから、ミシンができるんだ、カバンを縫うところで働いていて、こんなカバンを作っていたんだと、売り場にあつたしっかりとしたシヨルダーバッグを指さしました。そのおじさんに対して私は、いつも暇そうだな〜屋間からお酒飲んじゃって…と、これまではあまり良い印象

象は持っていないんですけど、この話を初めて聞いて、ほんの些細なことですが、嬉しい気分になりました。

常連さんがたくさんいて、お客さんと店員といういつもの関係の中、ほんの少しいつもと違う何かがあると、フツと突然その方の違う一面が見える瞬間があり、心が動かされます。お店をやっている楽しい、面白い瞬間です。普段はあまり話さない方も、何か話すきっかけが欲しかったりする方もいるのかな〜と思います。あえて外で看板を描いたり、営業時間内に店内の改装を試みたりもします。

最近、レジを自分で行ない、誰とも言葉を交わさなくても買物ができる店もたくさんあります。町工場で熟練した職人さんが手作業で行なっている技術にも、ロボットを導入し始めた先日ニュースで見ました。

どんどんIT化が進んでいる時代ですが、JFS Aにはアナログな方法がたくさん残っていて、言葉や気持ち、時には気合いで仕事をすすめていくことに、私は面白さを感じています。常連さんの中には、それを求めて足を運んでくださっている方もいるのではないかと思います。もちろん、効率化や経費削減のためには変化が必要な部分もありますが、やはり、物の売り買いの場は、人の手や会話が交わされる場であることが面白く、そのことがお店がある意味だと思えます。普段見慣れているものやことも、違った角度から見たり考えたりすることで新たな発見がある、そして時には普段の見慣れている場所をガラッと変えてみるとさらなる発見があった



9月8日(土)より、「軒先市」を始めました！
毎月第2土曜日10時～14時にショップの軒先で開催します。
様々なグループと一緒に作っていく場にしたいと考えています。
第一回目は、無農薬の野菜、パキスタンカレーやフライドチキン、
手作り雑貨などのグループが参加し、にぎわいました。

フェイスブックにて
イベントの紹介などしてます♪
「古着屋JFS A」で検索！

Instagramにて
商品の紹介などしてます♪
「jfsa_usedclothing」で検索！



上：倉庫2階部分に設けた在庫置き場
右：模様替えを行ない広がった
kapre (カブレ) 店内



東葛センター開設からもうすぐ8年になりますが、変化に合わせて毎年模様替えを行なっています。替える場所は大きく分けて3か所あって、売り場、在庫置き場、作業場です。今年4月から9月までの半年間で、3か所とも模様替えを行ないました。一度に行なうものとしては今までで一番大幅な変更です。

まず売り場については面積を増やしました。昨年度大きく売り上げを伸ばすことができ、今年もその昨年度を上回る結果となっているため、中でも好調なレディースの売り場を増やしました。増やした分減らした場所は、資材置場と言えれば聞こえの良い、今使っていない什器等を置いていた場所です。思い切って多くを処分しました。

続いて在庫置き場については、パキスタンからの輸入古着の増加に合わせて棚を設置しました。もともと在庫置き場は倉庫の2階部分を使っているのですが、今年は梅雨明けが早く7月初旬から真夏のような暑さとなり、その暑さの中での棚の設置作業と陳列作業はとても過酷なものとなりました。

最後の作業場については、今まで入口から見て奥で行っていたのを手前に移動しました。東葛センターでは2018年9月から衣類回収での直接持ち込みの日時について、今までは期間中の日曜日午後1時から5時までとしていましたが、期間中の全日午後1時から5時まで(要予約)に変更したため、常に受付の場所近くで作

業ができるように移動しました。

この模様替えについては東葛センターのスタッフ全員で話し合っって配置などを決めましたが、移動作業については今年の4月から新たに事務局となった小島くんが主に行ないました。体力があつて片付け上手なので大活躍でした。「これってまだ要りますか？」何度聞かれたか覚えていません。8年間積もったものがだいぶすっきりしました。

こうした大きな模様替えが必要となったのは、課題となっている衣類等の回収量が減少していることから輸入古着を増やした結果、売上が増えて売り場が手狭になってと事柄でつながるとそういうことですが、パキスタンで学ぶ子どもたちのために衣類等を提供してくれている人たちから始まり、店の雰囲気や気に入って通ってくれるお客さんがいて、それをつないでいこうというスタッフそれぞれがより良い形にしたいと思つたためだと思えます。スタッフの一人として少しずつ良い形になっていっていると感じていますが、東葛センターのもう一つの課題が人手不足です。来年の今頃にはより良い形を一緒に考える人が増えているといいなと思えます。

東葛センター担当事務局 田辺 航太郎

Instagramにて
商品の紹介などしてます♪
「kapre_usedclothing」で検索！

第61回コンテナ送り出し 24トン163kg



50kgに圧縮梱包したベールの中身が分かるようラベルを貼るサルマさん（手前右）



作業終了後、コンテナの前で

今回は招日中だったムザヒル校長、副校長のタスニームさん、サルマさん、25名のボランティアの皆さんと一緒に手伝ってもらいました。古着の選別作業を行なっている団体の皆さんや、協力団体の職員の方、JFSAの会員の方などが参加しました。

作業を始めてから、JFSAの前に自転車を止める男性がいました。薬物やアルコールなどの依存症からの回復支援施設である「千葉ダルク」に数年前まで入所していた男性でした。ダルクにいた際は、JFSAで選別作業に参加していました。今は、アパレルショップでアルバイトをしているそうです。

「どうして今日来てくださったのですか？」と尋ねました。「朝ごはんを食べながら、JFSAの古着ショップのインスタグラムを見ていました。そこに、今日コンテナの送り出し作業をするという文章と空っぽのコンテナの写真がありました。今日のアルバイトは午後からです。行かなきゃ！と思って来ました。」

JFSAは3年ぶりだそうです。午後まで一緒に作業をし、連絡先を交換しました。別れ際、私が「次9月なんですけど」と言うと「わかりました」と笑顔で答えてくれました。大変な作業だからと来てくれたのでしよう。送り出しの担当をしている事務局の入江は、とても嬉しそうに彼と話していました。

全部 プーラ 半分 アダ 少し トラ

チャエケサー



●チャエケサーの意味は・・・
パキスタンの公用語、ウルドゥー語で「チャエ」は「温かいミルクティー（チャイ）」、「ケサー」は「一緒に」で「チャイと一緒に」という意味になります。パキスタンではチャイを飲みながら、賑やかにおしゃべりを楽しまします。

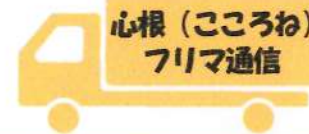
第61回コンテナ送り出しを行なった時、招日中だったタスニームさんとサルマさんに、ボランティアの皆さんと一緒に食べるパキスタンカレー調理に参加してもらい、腕を振るってもらいました。パキスタンカレーは、作る手順やスパイスなどの量が、各家庭で違います。今回はタスニームさんのカレーを作りました。

大変だったのは、このレシピをメモしていたボランティアさんです。プーラ（全部）、アダ（半分）、トラ（少し）という分量をなるべく分かりやすくメモし、レシピが完成しました。このカレーが食べられる送り出しは年に4回あります。次回は1月下旬を予定しています。タスニームさん直伝のカレーを食べたいという方は、JFSAまでお問い合わせください。

材料はほぼ自分量です。どのくらい入れるのか？と尋ねると「プーラ（全部）・アダ（半分）・トラ（少し）」のいずれかで返ってきました。例えば「生姜は全部入れていいの？」とタスニームさんに尋ねると、「アダ（半分）」。「コリアンダーパウダーは2つかみ入れた後、味見をしたタスニームさんが、1つかみ持っているボランティアさんに「プーラ（全部）」と言いました。塩は「トラ（少し）」と言われたので1つまみ入れ、味見してから「トラ（少し）」ともう少し塩を加えるよう教えてくれました。タスニームさんのさじ加減のおかげで、皆さんから大好評のカレーができました。



カレーを作ってくれたボランティアの皆さんとタスニームさん



バザールの少年の面影から

千葉センター担当事務局 入江 賢治

8月某日、私は夏休みの子ども向けの平和についての学習会の中で、JFSAの活動紹介をする時間をいただきました。その中で、JFSAの写真集「古着のゆくえをおいかけ」（2009年発行）をみなさんに見てもらいました。私は写真集を開いたのは実は久しぶりだったのですが、ある写真の所で目が留まりました。それは働く子どもたちの紹介という項目の中で、バザールで品物を入れるビニール袋を売るアフガン難民の少年を撮った写真でした。

AKBGは10年程前、JFSAが送ったコンテナの荷物の中の「バッグ」をバザールで小売りしていた時期がありました（再開発のためにバザールの開催頻度が減少し、販売は断念することになりました）。その当時は、事務局派遣の際にバザール販売の現場に見学に行くこともよくありました。その少年は私の娘（4歳）が通う保育所の友達に顔つきが似ていて、一瞬ふたりが重なりました。少年は5.6歳ぐらいに見え、負けん気の強そうな顔をしていました。おそらく写真を撮ってからもう15年以上経つでしょうが、今、彼はどのようなのだろう、という思いが迫ってきました。少年にはきつい仕事だったに違いないでしょうが、気持ちの強さで乗り切れたのでしょうか。



カラチ市内のバザール アル・カイルアカデミーの卒業生がバッグを販売していた

2枚の写真はJFSA写真集「古着のゆくえをおいかけ」（2009年発行）より



バザールで袋を売るアフガン難民の少年

JFSA出店の主なフリーマーケット会場

- 大井競馬場（品川区勝島） 味の素スタジアム（調布市西町） 赤羽公園（北区赤羽）
- 世田谷公園（世田谷区池尻） 千葉銀座通り（千葉市中央区）
- 池袋西口公園（豊島区西池袋）

天候やスケジュールの都合で出店できないこともあります。予めご了承ください。
フリマ情報ホームページ：<http://www.jfsa.jp/fm.html>



フリマ 出店情報



船橋駅北口デッキ 大古着市

日時：11月10日(土) 11日(日) 予定
10時～16時頃 ※雨天中止※

場所：JR船橋駅北口デッキ
(イトーヨーカドー側)



お買い得な
品物がたくさん!

千葉はお餅つき、
kapreはパキスタンカレー!
他にもお楽しみ企画満載♪

JFSA東葛センター&千葉センターバザール

●kapre 冬のバザール (柏市)

日時：12月2日(日)
10時～15時頃

場所：JFSA東葛センター
(柏市大室176-1)

●チャリティバザール (千葉市)

日時：12月9日(日)
10時～15時頃

場所：JFSA千葉センター&大田切公園
(千葉市中央区都町3-14-10)



JFSAの会員・支援メンバーを募集しています

JFSAは正会員及び賛助会員(支援メンバー)で構成されています。

(正会員 個人：140名、団体：11 賛助会員 個人：1113名、団体：4 2018年8月末現在)

正会員によって活動の様々な事柄が決定され、賛助会員の協力によって活動が支えられています。
そして皆さんの参加が、パキスタンの人々との連帯事業を推し進める力になります。

会員・支援メンバーの方には、会報・回収案内(年3回)、サポーターグッズ(年1回)をお送りします。

●年会費(10月～翌年9月)

個人：会員 5,000円 / 支援メンバー 2,000円

団体：会員 50,000円 / 支援メンバー 10,000円

●会費振込み口座(郵便振替)

番号：00160-7-444198

口座名：JFSA

*活動への寄付にも同じ口座がご利用できます。
通信欄に「寄付」とお書き添え下さい

JFSAでのボランティア募集

★イベントボランティア★

●kapre 冬のバザール

日時：12月2日(日) 8時～16時頃

場所：JFSA東葛センター
(柏市大室176-1)

※カレー作りを手伝ってくれる方など募集中

●チャリティバザール

日時：12月9日(日) 8時～16時頃

場所：JFSA千葉センター&大田切公園
(千葉市中央区都町3-14-10)

※餅のつき手など募集中

●船橋駅北口デッキ 大古着市

日時：11月10日・11日 予定

10日：8時～17時ごろ

11日：9時～18時ごろ

場所：船橋駅北口デッキ

★その他のボランティア

●コンテナ送り出し作業(年4回)

●イベント・フリーマーケットなどでの協力(週末)

●切手やハガキの整理

●会報など発送作業(年4回)

●古着の選別体験(グループ対応)

●和服整理ボランティア(毎月第1火曜日10時半～)

★ボランティアに関する問合せ先

●JFSA事務局(木曜定休 9時～19時半)

電話・FAX：043-234-1206

メール：jfsa@f3.dion.ne.jp

ホームページ：www.jfsa.jp.org

*ボランティアは無償です。

交通費や食費はご自分で負担していただいています。

NPO法人 日本ファイバーリサイクル連帯協議会(JFSA) (9時～19時半/木曜定休)

千葉センター 千葉市中央区都町3-14-10 東葛センター 柏市大室176-1

Tel：043-234-1206

Tel：04-7110-0984

★ 会報についての感想やご意見もお気軽にお寄せください。

電話・fax：043-234-1206 メール：jfsa@f3.dion.ne.jp ホームページ：http://jfsa.jp.org

JFSAの
ホームページ



フェイスブックにて
イベントの紹介などとしてます♪
「古着屋JFSA」で検索!



インスタグラムにて商品の紹介などとしてます♪
千葉ショップ「jfsa_usedclothing」で検索!
kapre(カブレ)「kapre_usedclothing」で検索!